

『ハンバル学派列伝への補遺』におけるハンバル学派とスーフィズム

原 陸郎*

The Ḥanbalī School and Sufism in *al-Dhayl ‘alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*
(*The Supplement to the Biography Collection of Hanbalis*)

HARA Rikuo

The present paper reviews the descriptions of Sufism in *al-Dhayl ‘alā al-Ṭabaqāt al-Ḥanābila* (*The Supplement to the Biography Collection of Hanbalis*) composed by Ibn Rajab (d. 795/1393). Despite the richness of information on Sufism, this work has not been well studied in Ḥanbalī or Sufī studies. First, it provides an overview of studies of the Ḥanbalī school and Sufism, and indicates the point at issue. It then introduces *al-Dhayl* and its author. Subsequently, it extracts the major elements of Sufism appearing in the biographical entries of *al-Dhayl* and examines which previous studies have not done so. In addition, the descriptions of al-Ḥallāj (d. 309/922) and *Manāzil al-sā‘irīn*, the masterpiece by Ḥanbalī Sufi ‘Abd Allāh al-Anṣārī al-Harawī (d. 481/1089), are investigated to indicate Ibn Rajab’s criterion of Sufism in line with *Manāzil*’s interpretation. Finally, in the conclusion, the paper suggests that the Ḥanbalī school has a diverse tradition of Sufism which is not merely developed in a traditionalist or ascetic manner while they clearly reject the concept of *waḥda al-wujūd* and *ittiḥādīya*.

はじめに

本稿は、これまで等閑視されてきたハンバル学派内におけるスーフィズムの伝統について、イブン・ラジャブ (Ibn Rajab, d. 795/1393) の『ハンバル学派列伝への補遺 (*al-Dhayl ‘alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*, 以下「補遺」と表記する)』を用いて論じる。そして、同書におけるスーフィー／スーフィズムに関する記述に注目し、それらの描写を整理することで、ハンバル学派におけるスーフィズム伝統の再検討を試み、その実態について明らかにする。

1. 問題の所在

ハンバル学派は、他のスンナ派四大法学派と同様にスーフィズムを受け容れていたが、そうした伝統は等閑視されてきたと言える。二項対立的理解が主流であった1970年代に、ハンバル学派とスーフィズムが対立するものではないということは、G. マクディスィーによる一連の研究で示されてきた [Makdisi 1973; 1979]。また、彼によればハンバル学派は哲学的スーフィズムを批判していた一方で、伝承主義的、禁欲主義的な形でのスーフィズムを許容していたという [Makdisi 2005: 3759]。しかし、これまでの研究は、イブン・ジャウズイー (Ibn Jawzī, d. 597/1201) やイブン・タイミーヤ (Ibn Taymīya, d. 728/1328) など、スーフィズムを攻撃してきたとされる学者たちのスーフィズム観を再考することに集中してきた¹⁾。近年では、後者の弟子のイブン・カイイム・ジャウズイーヤ (Ibn Qayyim al-Jawzīya, d. 751/1350) やワースィティー (‘Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī, d. 711/1311) などの思想研究も進んでいる [cf. Anjum 2010; Post 2020; Post and van Eyken 2024]

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) イブン・タイミーヤに関する議論については、[Knysh 1999: 87-111; 東長 2013: 190-203] に詳しい。

が、ハンバル学派という枠組みにおけるスーフィズム研究はほとんど為されてきていないのが現状である²⁾。

ハンバリー・スーフィー³⁾の系譜として現在提示されているものには、上記のマクディスィーによる研究[Makdisi 1973; 1979]と、アブドゥッラー・アンサーリー(‘Abd Allāh al-Anṣārī al-Harawī, d. 481/1089)を軸とした[Farhādī 1996: 14]の、二つがある。前者はアブドゥルカーディル・ジラーニー(‘Abd al-Qādir al-Jīlānī, d. 561/1166)のシルスィラによって示されたもので、『補遺』の著者イブン・ラジャブもイブン・カイムを通じてその系譜に連なっている。後者はハンバル学派のスーフィズム史的展開におけるアンサーリーの立ち位置を表したものであり、ここでイブン・ラジャブは、イブン・タイミーヤやイブン・カイムとは異なりアンサーリーに直接連なる潮流⁴⁾に組み込まれている[Farhādī 1996: 12]。

『補遺』自体を対象とした先行研究は非常に少なく⁵⁾、ある学者の略歴に関する資料として用いられることがほとんどである[e.g., Laoust 1959; 1960]。そのため、マクディスィーがハンバル学派とスーフィズムの関係性について論じた際に、各学者の伝記記事だけでなく、同書全体に目を配っていたことは注目に値する[Makdisi 1979]。彼によれば、『補遺』の約三分の一の内容はスーフィーやスーフィズムに関するものである[Makdisi 2005: 3762]。そして立項されている六分の一の学者がスーフィーで、そのうち「スーフィー」と明記されているのは10人、明記されていないがそうであると考えられるのは27人であり、さらには「スーフィー」と「禁欲主義者」という肩書きは、互いに交換可能なものであったということを示した[Makdisi 1979: 117]。しかし、マクディスィーの研究は、ハンバル学派内にスーフィーがいたという事実を示すことが主眼とされているため、彼ら個々人の描写についてはそれほど注意が払われていない。また、おそらくマクディスィーの研究を受けて、アブドゥルハック・マッキーは『補遺』中のスーフィー、もしくはスーフィズムと関連する学者を28人挙げている[al-Makki 2001: 131–175]。しかし、その内容はあくまでも『補遺』の伝記記事の引用に過ぎない。ここでは選定理由が示されておらず、具体的な分析も為されていないため、ハンバル学派のスーフィー／スーフィズム像は今なお不明瞭である⁶⁾。

そこで本稿では、マクディスィーが挙げた37人と、マッキーが挙げた28人の伝記記事を分析する⁷⁾。『補遺』というハンバル学派の伝記資料において、学者たちのスーフィー／スーフィズムとの関わりがどのように記述されているのか、またスーフィーとしての彼らがどのように描写されているのかを検討することで、ハンバル学派のスーフィズム伝統を捉え直す。そして、イブン・ラジャブの記述を通して、学派内でどのようなスーフィズムが「正しい」ものとして描かれてきたのかを明らかにする。

2) 9–10世紀のバグダードにおける初期スーフィーとハンバル学派の関係性について論じた[Melchert 2001]などはあるが、スーフィズムが「正統な」イスラーム諸学のひとつとして数えられるようになった後の両者の関係性について論じたものは少ない。

3) ハンバル学派に属し、かつスーフィーであった人物を指す。

4) この分類はアンサーリー以外の思想を分析したものではないため、あくまでも参考に留めておくべきであろう。また、言及されていないがマクディスィーの研究がおそらく参考にされた系譜である。

5) マクディスィーは、タバカートという書物の種類の成立と発展を論じ、そこで伝承主義とハンバル学派の果たした役割について述べているが、『補遺』への言及は見られない[Makdisi 1993]。

6) [al-Makki 2001]と同様にハンバル学派に属したとされるスーフィーを列挙した研究[Darnīqa 2013]もあるが、選定理由や記事の分析は見られない。また、使用資料が『補遺』には限られない。

7) マッキーが挙げた28人の半数近くがマクディスィーのものと重複しているため、実際に本稿で取り上げるのは47人である。

2. 『ハンバル学派列伝への補遺』に見るスーフィー／スーフィズムに関する描写

2-1. イブン・ラジャブ

イブン・ラジャブ (Zayn al-Dīn ‘Abd al-Rahmān b. Aḥmad b. Rajab al-Baghdādī al-Dimashqī) は 736/1335–6年にバグダードに生まれ、ハディース学者・クルアーン読誦学者であった父のアフマドと共にヒジャーズやカイロなどを遊学した。その後 744/1343年にダマスクスへと移り、以降はイブン・カイイムらに師事した [al-Matroudi 2019]。795/1393年にダマスクスで没し、バーブ・サギール門の墓地に葬られた⁸⁾。イスラーム諸学を広く修めたが、特に法学やハディース学の分野で著名であり、「中世ハンバル学派の最後の大家」とも評されている [Laoust 1971: 822]。また、彼は禁欲主義者としても名高く知られている。

60以上の著作を残しており、その中でも主著は法学書の『法的諸原則 (*al-Qawā'id al-fiqhīya*)』と言われている。ブハーリー (Ibn Ismā'īl al-Bukhārī, d. 256/870) の『真正集 (*Ṣaḥīḥ*)』への注釈書『創造者の開示 (*Faṭḥ al-Bārī*)』は未完に終わったが、イブン・ハジャール・アスカラーニー (Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, d. 852/1449) が引き継ぎ、同題で完成させたことでも知られている⁹⁾。

2-2. 『ハンバル学派列伝への補遺』

イブン・ラジャブの『補遺』は、イブン・アビー・ヤアラー (Ibn Abī Ya'lā, d. 526/1131)¹⁰⁾ による『ハンバル学派列伝 (*Ṭabaqāt al-Ḥanābila*)』に対し、より後代の学者たちを補完する目的で著されたもので、5/11世紀から8/14世紀までのハンバル学派に属した人物を552人収録した伝記集である¹¹⁾。記事の情報源としては、イブン・ジャウズイーの『整然 (*al-Muntaẓim*)』、スィブト・イブン・ジャウズイー (Sibt ibn al-Jawzī, d. 654/1256–57)¹²⁾ の『時代の鏡 (*Mir'āt al-zamān*)』、ザハビー (Shams al-Dīn al-Dhahabī, d. 748/1348) の『伝記集 (*Siyar*)』などが見られる。記事の構成は、立項される人物によって差異はあるが、概ね以下の通りである。

- 名前、肩書き、クンヤ／ラカブ／ニスバといった通称、生年、出身地
- ハディースを聞いた人物
- 学んだ学問と師の名前
- 生涯、逸話
- 著作
- 没年、葬儀の様子
- 独自の学説や、伝えたハディースについて

3. スーフィー／スーフィズムに関する記述

3-1. スーフィーと明記される人物

8) 師のイブン・カイイムもここに埋葬された。なお、イブン・タイミーヤはスーフィー墓地に墓がある。

9) イブン・ハジャールの代表作とされており、842/1438年に完成し、その後イスラーム世界中で広く読まれた [Rosenthal 1971: 778]。

10) ハンバル学派の著名な学者であるアブー・ヤアラー (Abū Ya'lā, d. 458/1066) の息子。『ハンバル学派列伝』以外にも法学書などを著した。

11) イブン・タイミーヤ研究で著名なラウストによる校訂本もあるが、第1巻のみであり、第2巻は刊行されていないようである。Ibn Rajab, *Kitāb al-Dhayl 'alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*, vol. 1, Henri Laoust and Sāmī Dahhān (eds.), Dimashq: al-Ma'had al-Faransī bi Dimashq li al-Dirāsa al-'Arabīya, 1951.

12) イブン・ジャウズイーの孫。ハンバル学派ではなくハナフィー学派に属した。

表1.『補遺』で「スーフィー」と明記される人物

文献内番号	名前	没年	主に活動した地域	肩書き
22	Aḥmad b. ‘Alī b. ‘Abd Allāh al-Baghdādī	476/1084	バグダード	クルアーン読誦学者(muqri’)、スーフィー(ṣūfī)、教者(mu’addib)
27	‘Abd Allāh b. Muḥammad b. ‘Alī b. Muḥammad b. Aḥmad b. ‘Alī b. Ja‘far b. Maṣṣūr b. al-Anṣārī al-Harawī	481/1089	ヘラート	法学者(faqīh)、クルアーン註解者(mufasssir)、ハーフィズ(hāfiẓ)、スーフィー、諫言師(wā‘iz)、イスラームの師(shaykh al-Islām)
136	Hiba Allāh b. ‘Abd Allāh b. Kāmil b. Ḥabīsh al-Baghdādī	563/1167	バグダード	スーフィー、法学者
137	Sa‘d Allāh b. Naṣr b. Sa‘īd	564/1169	バグダード	法学者、諫言師、クルアーン読誦学者、文人(adīb)
389	Abū al-Qāsim b. Yūsuf b. Abī al-Qāsim b. ‘Abd al-Salām al-Amūwī al-Ḥawwārī	663/1265	ハウワラー(現在のイルビドの一部)	スーフィー、著名な禁欲主義者(zāhid mashhūr)
393	Yūsuf b. ‘Alī b. Aḥmad b. al-Biqāl al-Baghdādī	662/1263	バグダード	スーフィー、義者(ṣāliḥ)、知識人(‘ālim)、敬虔な者(warī‘)、禁欲主義者
398	‘Alī b. ‘Uthmān ‘Abd al-Qādir b. Muḥammad b. Yūsuf b. al-Wujūhī al-Baghdādī	674/1275	バグダード	クルアーン読誦学者、スーフィー、禁欲主義者
445	‘Abd al-‘Azīz b. Abī Qāsim b. ‘Uthmān b. ‘Abd al-Wahhāb al-Bābaṣārī	697/1298	ダマスクス	法学者、文人、スーフィー
463	‘Alī b. Maṣ‘ūd b. Nāqis b. ‘Abd Allāh al-Mawṣalī thumma al-Ḥalabī	704/1304	ダマスクス、アレppo	スーフィー、ハディース学者(muḥaddith)、ハーフィズ、禁欲主義者
466	Muḥammad b. ‘Abd Allāh b. ‘Umar b. Abī al-Qāsim al-Baghdādī	704/1305	バグダード	クルアーン読誦学者、ハディース学者、スーフィー、書記(kātib)

[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1-2] から作成。

『補遺』においては、10人が「スーフィー」という肩書きと共に立項されている(表1 参照)¹³⁾。こうした「スーフィー」という肩書きに並列して用いられている肩書きは、「クルアーン読誦学者(muqri’)」 「教師(mu’addib)」 「法学者(faqīh)」 「クルアーン註解者(mufasssir)」 「ハーフィズ(hāfiẓ)¹⁴⁾」 「諫言師(wā‘iz)」 「文人(adīb)」 「禁欲主義者(zāhid)」 「義者(ṣāliḥ)」 「知識人(‘ālim)」 「敬虔な者(warī‘)」 「ハディース学者(muḥaddith)」 「書記(kātib)」 などと多様多様である。ここで「スーフィー」と必ず併用されるようなものは見られず、彼らの職業も法学者やハディース学者などで、各々異なっている。ハンバル学派という学者集団の列伝という性格上、ここで挙げた人物たちのほとんどが学者であるが、389の人物のように、所謂学者とは見做されない人物も立項されているなど、多様なスーフィーがハンバル学派には存在していたことがわかる。

このような「スーフィー」と明記される10人の中で、修道場(ribāṭ/ khānqāh/ zāwiya)に関連するような人物は7人いる(136、137、389、393、398、445、466)。1人(137)を除いて、修道場を所有もしくは監督していたという記述が見られる。

タリーカに明確に関する人物は1人(466)存在し、彼はスフラワルディー教団のヒルカを纏ったという記述がある。その一方で、ここではハンバル学派内で重要な役割を果たしたジラーニー及びそのタリーカ／道統に関しては言及されていない。

13) 22、27、136、137、389、393、398、445、463、466の10人(各番号は『補遺』における通し番号) [Makdisi 1979: n. 7]。

14) クルアーン暗誦者もしくはハディースを大量に暗記・保持している者を指す。ハディース学者の多いハンバル学派においては後者であることが多い。

「正しい」スーフィズムを説いたという記述があるのは2人(27、389)。27の人物はクルアーンとスンナに基づかないスーフィズム思想を批判したとされる¹⁵⁾。389の人物は多くの弟子を持ったが、「彼らはタンバリンのあるサマウ[の集会]には出なかった(lā yaḥḍurūna samā‘ bi al-duff)」と言われてるように、彼にとって逸脱した実践を批判したとされる[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 2, 224]。

「スーフィー」と明記されながらも、スーフィー／スーフィズムに関連した記述が見られないのは1人(22)。この人物はバグダードの高名なクルアーン読誦学者であり、彼が詠んだカスィーダが引用されるなど、伝記記事自体が短いわけではないが¹⁶⁾、スーフィーとしての描写は欠いている。そのため、このことからイブン・ラジャブにとって「スーフィー」という呼称が当て嵌まる対象は所謂「スーフィー」のような者だけではなく、それは特別に用いられる肩書きでもないということがわかる。

3-2. 「スーフィー」と明記されていないが、そうであると考えられる場合

次に、肩書きには「スーフィー」と記されていないが、実際にはそうであったと先行研究で考えられている37人を見る(表2参照)¹⁷⁾。「スーフィー」の肩書きが用いられる人物たちの場合と同様に、ここで挙げた37人の肩書きは多種多様で、そこに統一性はない。そのため、彼らがスーフィーであるかどうかは不明であり、実際の伝記記事の内容を検討する必要がある。ここでは彼らの肩書きは参照程度にとどめておくべきであると考えられる。

表2. 「スーフィー」と明記されていないがそうであると考えられる人物

文献内番号	名前	没年	主に活動した地域	肩書き
98	‘Abd Allāh b. ‘Alī b. Aḥmad b. ‘Abd Allāh al-Baghdādī	541/1146	バグダード	クルアーン読誦学者、文法学者(naḥwī)、文人、禁欲主義者(zāhid)
134	‘Abd al-Qādir b. Abī Šāliḥ b. ‘Abd Allāh b. Jankī Dūst b. Abī ‘Abd Allāh b. ‘Abd Allāh al-Jīlī thumma al-Baghdādī	561/1166	バグダード	禁欲主義者、時代のシャイフ(shaykh al-‘aṣr)、真知者たちの模範(qudwa al-‘ārifīn)、シャイフたちのスルターン(sultān al-mashāyikh)、彼の時代における道の徒の主人(sayyid ahl al-tarīqa fi waqt-h)、神秘階梯、奇蹟、知識・真知、有名な心的境地の持ち主(ṣāhib al-maqāmāt wa al-karāmāt, wa al-‘ulūm wa al-ma‘ārif, wa al-aḥwāl al-mashhūra)。
139	‘Uthmān b. Marzūq b. Ḥamīd b. Salām al-Qurashī	564/1168–69	ダマスカス、エジプト	法学者、真知者(‘arif)、禁欲主義者
193	Sa‘d b. ‘Uthmān b. Marzūq b. Ḥamīd b. Salām al-Qurashī	592/1196	バグダード	法学者、禁欲主義者
196	‘Abd al-Wahhāb b. ‘Abd al-Qādir b. Abī Šāliḥ al-Jīlī, thumma al-Baghdādī al-Azjī	593/1197	バグダード	法学者、諫言師

15) アンサーリーについては後述する。

16) 同じくスーフィーと明記される136の人物の記事[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 253-254]と比べると、その分量は5倍ほどである。

17) 98、134、139、193、196、197、200、214、224、229、233、245、255、272、274、289、302、307、313、323、369、370、373、381、396、397、405、415、436、448、461、472、492、493、514、551[Makdisi 1979: n. 8; al-Makkī 2001: 131–175]。

197	Ṭalḥa b. Muzaḥfar b. Ghānim b. Muḥammad al-‘Althī	593/1197	バグダード	法学者、演説家 (khaṭīb)、ハディース学者 (muḥaddith)、相続法学者 (farḍī)、純然たる者 (nuḍār)、クルアーン註解者、禁欲主義者、敬虔な者、真知者
200	al-Ḥasan b. Muslim b. al-Ḥasan もしくは Abū al-Ḥasan b. Abī al-Jūd al-Fārisī thumma al-Ḥūrī	594/1197	イラン、ハウラーン	時の禁欲主義者 (zāhid waqt-h)
214	‘Abd al-Ghanī b. ‘Abd al-Wāhid b. ‘Alī b. Surūr b. Rāfi’ b. Ḥasan b. Ja‘far al-Jammā‘ī al-Maqdisī	600/1203	ダマスクス、アレクサンドリア	クルアーン暗誦者、禁欲主義者
224	‘Abd Allāh b. Abī al-Ḥasan b. Abī al-Faraj al-Jubbā‘ī al-Ṭarābulṣī al-Shāmī	605/1208	バグダード	法学者、禁欲主義者
229	Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad b. Qudāma b. Miqdām b. Naṣr b. ‘Abd Allāh al-Jammā‘ī al-Maqdisī thumma al-Dimashqī	607/1210	ダマスクス	義者、禁欲主義者、崇拜者 (‘ābid)
233	Maḥmūd b. ‘Uthmān b. Makārim al-Na‘āl al-Baghdādī al-Azjī	609/1212	バグダード	法学者、諫言師、禁欲主義者
245	Muḥammad b. Mālī b. Ghānima al-Baghdādī al-Ma’mūnī	611/1215	バグダード	クルアーン読誦学者、法学者、禁欲主義者
255	Ibrāhīm b. ‘Abd al-Wāhid b. ‘Alī b. Surūr al-Maqdisī al-Dimashqī	614/1218	ダマスクス	法学者、禁欲主義者、敬虔な者、崇拜者
272	‘Abd Allāh b. Aḥmad b. Muḥammad b. Qudāma b. Muqadam b. Naṣr ‘Abd Allāh al-Maqdisī thumma al-Dimashqī al-Ṣāliḥī	620/1223	イェルサレム、ダマスクス	法学者、禁欲主義者、指導者 (imām)、イスラームの師
274	Muḥammad b. al-Khaḍar b. Muḥammad b. ‘Alī b. ‘Abd Allāh b. Taymīya al-Ḥarrānī	622/1225	ハッラーン	法学者、クルアーン註解者、説教師、諫言師、ハッラーンの師で同地の説教師 (shaykh Harran wa khatib-hā)
289	‘Abd al-Raḥman b. ‘Alī b. Aḥmad b. ‘Alī b. Muḥammad al-Tanraya al-Baghdādī	626/1229	バグダード	諫言師、法学者、改正者 (mu‘addil)、裁判官 (ḥakīm)
302	‘Abd al-Ghanī	583/1187	バグダード	
307	Naṣr b. ‘Abd al-Razzāq b. ‘Abd al-Qādir b. Abī Ṣāliḥ b. Jankī ¹⁸⁾ Dūst al-Ḥanbalī al-Aṣl al-Baghdādī	633/1236	バグダード	法学者、監督者 (munāzir)、ハディース学者、禁欲主義者、諫言師、大カーディー (qādī al-quḍāt)、時のシャイフ (shaykh al-waqt)
313	Ishāq b. Aḥmad b. Muḥammad b. Ghānim al-‘Althī	634/1236		模範たる禁欲主義者 (zāhid quḍwa)
323	‘Abd al-‘Azīz b. Dalf b. Abī Ṭālib b. Dalf b. Abī al-Qāsim al-Baghdādī	637/1239	バグダード	クルアーン読誦学者、書写生 (nāsikh)、会計士 (khāzin)
369	Yahyā b. Yūsuf b. Yahyā b. Maṣṣūr b. al-Mu‘ammar b. ‘Abd al-Salām al-Anṣārī al-Ṣarṣarī al-Zarīrānī	656/1258	バグダード	盲者 (ḍarīr)、法学者、文人、言語学者 (lughawī)、詩人 (shā‘ir)、禁欲主義者
370	‘Alī b. Sulaymān b. Abī al-‘Izz al-Khabbāz	656/1258	バグダード	禁欲主義者、義い者、器量が大きい者 (kabīr al-qadr)、模範 (quḍwa)
373	Muḥammad b. Naṣr b. ‘Abd al-Qādir b. Abī Ṣāliḥ al-Jilī al-Baghdādī	656/1258	バグダード	法学者、禁欲主義者、大カーディー
381	Muḥammad b. Aḥmad b. ‘Abd Allāh b. ‘Īsa b. Abī al-Rijāl Aḥmad b. ‘Alī al-Yūnīnī al-Ba‘labakkī	658/1260	バアルバック、ダマスクス	シャイフ (shaykh)、法学者、ハディース学者、ハーフィズ、禁欲主義者、真知者、敬虔な信徒 (rabbānī)
396	‘Abd al-Qāhir b. Abī Muḥammad ‘Abd al-Ghanī b. Shaykh Fakhr al-Dīn Muḥammad b. Abī Qāsim Ibn Taymīya bi Dimashq	不明 (612/1215–16年生まれ)	ダマスクス、ハッラーン	
397	‘Alī b. Muḥammad b. Muḥammad b. Abī Sa’d b. Waḍāḥ al-Shahrāyānī thumma al-Baghdādī	672/1273	バグダード	法学者、ハディース学者、禁欲主義者、書記

18) 原文では、Hankī.

405	‘Abd al-Ṣamad b. Aḥmad b. Aḥmad b. ‘Abd al-Qādir b. Abī al-Ḥusayn b. Abī al-Jaysh b. ‘Abd Allāh al-Baghdādī al-Qaṭfātī	676/1277	バグダード	クルアーン読誦者、ハディース学者、文法学者、言語学者、書記、諫言師、禁欲主義者、バグダードの師で同地の説教師 (shaykh Baghdād wa khātib-hā)
415	‘Abd al-Raḥman b. Muḥammad b. Aḥmad b. Qudāma al-Maqdisī al-Jammā‘ī al-Aṣl al-‘Amālīhī	682/1283	ダマスクス	法学者、指導者、禁欲主義者、説教師、大カーディー、イスラームの師
436	Ibrāhīm b. ‘Alī b. Aḥmad b. Faḍl al-Wāsiṭī al-Ṣālīhī	692/1293	ダマスクス	法学者、禁欲主義者、崇拜者、イスラームの師、シャームの恩寵 (baraka al-Shām)、時の枢軸 (qutb al-waqt)
448	‘Abd al-Ḥafīz b. Badrān b. Shibl b. Ṭarkhān al-Maqdisī al-Nāblusī	不明 (90歳頃まで生きた)	ナーブルス、ダマスクス	
461	Ibrāhīm b. Aḥmad b. Muḥammad b. Ma‘ālī b. Muḥammad b. ‘Abd al-Karīm al-Raqī	703/1303	バグダード	禁欲主義者、知識人、敬虔な模範 (al-quḍwa al-rabbānī)
472	Aḥmad b. Ibrāhīm b. ‘Abd al-Raḥman b. Mas‘ūd b. ‘Umar al-Wāsiṭī al-Hizāmī	711/1311	ワースイト、アレクサンドリア、ダマスクス	禁欲主義者、模範、真知者
473	Muḥammad b. Aḥmad b. Abī al-Naṣr b. al-Dabāhī al-Baghdādī	711/1311	マッカ、ダマスクス	禁欲主義者
492	‘Abd Allāh b. ‘Abd al-Ḥalīm b. ‘Abd al-Salām b. ‘Abd Allāh b. Abī Qāsim b. al-Khaḍar b. Muḥammad b. Taymīya al-Harrānī thumma al-Dimashqī	727/1327	ダマスクス	法学者、指導者、禁欲主義者、崇拜者、模範、多才な者 (mutafannin)
493	Muḥammad b. ‘Abd al-Muḥsin b. Abī al-Hasan b. ‘Abd al-Ghaḥfār b. al-Kharṭāt al-Baghdādī al-Qaṭī‘ī al-Azajī	728/1328	バグダード、ダマスクス	ハディース学者、諫言師
514	‘Abd al-Raḥmān b. Maḥmūd b. ‘Abīd al-Ba‘lī	734/1333	ダマスクス	法学者、禁欲主義者、真知者
551	Muḥammad b. Abī Bakr b. Ayyūb b. Sa‘d b. Jarīz al-Zur‘ī thumma al-Dimashqī	751/1350	ダマスクス	法学者、ウスール(・ル=フィクフ／・ツ=ディーン)学者、クルアーン註解者、文法学者、真知者

[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1-2] から作成。

ここで挙げた人物たちの中で中心的存在となるのは、アブドゥルカーディル・ジラーニー (134の人物) である。上述したように彼はアンサーリーと並ぶ、ハンバル学派を代表するスーフィーであり、タリーカ・カーディリーヤの名祖である。彼に同道するなど、直接的・間接的に何らかの関係を持った人物は 12 人いる (139、193、196、200、214、224、233、369、373、381、493、514)。また、一般にタリーカの特徴とされるヒルカの授与という慣行も、ハンバル学派内で為されていたことがわかる (139、369、381)。ただし、ジラーニーとの関わりについては、スーフィズムのみに関する記述が見られるのではなく、法学やハディース学を彼から学んだという事実のみにとどまる場合もある (214、224)。そして、『補遺』においてこうしたタリーカを「スーフィー教団」とするような描写は見当たらないため、ここではタリーカを、あくまでも共通のスタイルを戴く「道統」や「流派」として捉えるべきであろう。

そして、修道場に関わっていたのは、12 人 (134、193、196、197、233、272、289、307、370、405、448、493)。スーフィーと明記される人物たちと同様に、その多くが修道場を所有もしくは監督していたことがわかる¹⁹⁾。

「カラーマ (karāma, pl. karāmāt)」を持つと言われたり、奇跡譚が紹介されたりしているのは、12

19) マムルーク朝期になるとハーンカーはマドラサと同一施設となる場合も多いため、所有・監督という事実のみによって当該人物を「スーフィー」とであると断言することには留保が必要である。

人(134、139、200、224、229、255、272、274、370、381、492、514)。その中には、法学者として著名なイブン・クダーマ(272の人物)をはじめ、「法学者」の肩書きを有する者が多く挙げられており、奇跡の担い手はスーフィーや聖者とは限らないことがわかる。ここで注意しなければならないのは、明らかな奇跡譚を有する人物を指して「諸奇跡を持つ(la-h karāmāt)」と書き記される場合と、そうでない場合があるということである。後者の場合は、より一般的な意味で「高潔さ」ともとれる。

スーフィズム実践に関連する記述があるのは、13人(134、139、224、245、313、369、381、448、461、472、473、514、551)。心的境地(hāl, pl. aḥwāl)や修行階梯(maqām, pl. maqāmāt)を持つとされる人物が多くいる一方で、具体的な実践については描写されていない場合が多い。しかし、「隠遁(inqītā‘ /‘uzla /tafarrud)」を行っていた人物も確認できる(245、448)。

「正しい」スーフィズムとそうでないものの違いに関する描写があるのは、5人(98、224、313、381、397、472)。法学の重要性について言及されているほか(224)、合一主義や逸脱したスーフィズム実践を批判していた。

「聖者」に関する語が見られるのは、4人(229、274、436、514)。ここでは「枢軸(qutb)」や「補佐人(abdāl)²⁰⁾」といった、スーフィズムの文脈ではワリーの位階を指す語が用いられている。各記事の内容を精査すると、これらは卓越した存在に冠しているものであり、必ずしも「聖者」のような意味合いを持っているわけではないようである。しかしその一方で、514の人物の記事においては明らかに聖者論が意識された内容となっており、イブン・ラジャブがスーフィズムの聖者論を全否定しているわけではないということが窺える。

3-3. スーフィーではないと考えられる人物

これまで『補遺』におけるスーフィー像について検討してきたが、それと同時に必ずしもスーフィーと言い切れない人物が浮かび上がってきた。上記の37人のうちから言えば、12人(214、229、245、255、272、274、313、323、373、396、415、436)が挙げられる(表2参照)。ここでスーフィーとは断言できないとした理由については、スーフィズムに関連した記述はある程度見られるものの、彼ら自身に関してスーフィー的要素が見られないからである。例えば、214と272の人物はともにジラーニーに師事したが、前述したようにその内容はあくまでも法学に関することである。同様に、274は父親が禁欲主義者で「補佐人」のひとりであったことなどが記されているものの、本人に対するスーフィズムに関連した記述は伝記記事中に欠けている。

さらに、ここで問題になるのは禁欲主義の扱いについてである。表2からは、「スーフィー」とされる多くの人物が「禁欲主義者」であることがわかる。伝記記事の中で、人々から離れて過ごしていたり頻繁に斎戒を行っていたりするといった禁欲的な描写が為されている人物は多いが²¹⁾、それとスーフィー／スーフィズムは必ずしも結びついているわけではない。『補遺』が収録しているのは11世紀以降の人物であり、上に挙げた者たちが活動していたのはスーフィズムが一般に受け入れられ大衆化も進んでいた時代であるが、スーフィーでない禁欲主義者も広く存在していた。マクディシーは、「スーフィー」と「禁欲主義者」はおそらく交換可能(interchangeable)であると結論づけているものの[Makdisi 1979: 117]、これには疑問が残る。誰が「スーフィー」であるのかと

20) 「枢軸」を補佐する聖者の階級のひとつ。この語はハディースに由来し、スーフィズムの聖者論以前から使われてきた[Melchert 2020: 112–118]。

21) 例えば、245の人物。彼は頻繁に隠遁(inqītā‘ /‘uzla /tafarrud)を行っていたという記述が見られるが、この修行実践がスーフィーのものであると断言するのは難しい。

という問いは非常に大きいですが、禁欲主義者であればその人物が必ずスーフィーである、とは言えないからである²²⁾。

4. 「正しい」スーフィズムをめぐる記述

ハンバル学派にはスーフィーが多く存在し、伝記集である『補遺』でもスーフィズムに関する描写が頻繁に現れることを、これまでに確認してきた。それでは、同書ではどのようなスーフィズムが「正しい」と認められ、反対に何が誤っていると捉えられてきたのであろうか。その特徴を見ることで、ハンバル学派におけるスーフィズムに関する学説が如何に整理されてきたかを検討する。

『補遺』におけるスーフィー批判の指針のひとつとしてまず確認できるのは、ハッラージュ (Ibn Maṣṣūr al-Ḥallāj, d. 309/922) に対する見解である。ハッラージュに親近感を抱いたハンバル学派の学者の中には、イブン・アキール (Abū al-Wafā' ibn 'Aqīl, d. 513/1119、文献内番号「66」)²³⁾ が挙げられる。彼は上述した先行研究には挙げられていないが、諸学を修めたほかにスーフィズムの作法 (ādāb al-taṣawwuf) も学んだと記されている [Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 119]。しかし、彼は「ムウタズィラ学派の称賛 (ta'zīm al-M' tazila)」と「ハッラージュへの憐憫 (taḥarrum 'alā al-Ḥallāj)」を自著の中で示したことによって学派内で糾弾され、謝罪・撤回を余儀なくされたという [Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 120–121]。このように、イブン・アキールがスーフィズムを学んだことについては批判的に言及されていないが、ハッラージュと結びついた際に批判されているということがわかる。他にも、アブドゥッラフマーン・イブン・ガッザール (Shihāb al-Dīn 'Abd al-Raḥmān ibn al-Ghazzālī, d. 615/1218、文献内番号「256」) という諫言師が、『ハッラージュ語録 (Akhbār al-Ḥallāj)』の一部を自ら写し、ハッラージュを称賛していたほか、イブン・アキールの言葉の引用を行っていたという記述が見られるが、イブン・ラジャブは以上のことを過ちであると評している [Ibn Rajab 1417/1997: vol. 2, 83]。以上のようなハッラージュ批判においては、いかなる点が誤りであるかは具体的に記されていないものの、彼の醉言や受肉論が原因であると推察される²⁴⁾。

次に、アブドゥッラー・アンサーリー (表1、27の人物) への評価をもとに、イブン・ラジャブがどのような立場を採るのかに注目する。アンサーリーは、これまでに紹介してきたようにハンバル学派の代表的なスーフィーとして知られ、「イスラームの師 (shaykh al-Islām)」として学派内で評される人物である。イブン・ラジャブはアンサーリーの伝記記事で、彼を「諸々の心的境地・階梯・奇跡・観照 (al-aḥwāl wa al-maqāmāt wa al-karāmāt wa al-mujāhādāt) を持った」 [Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 43] と紹介する。こうした表現は他のスーフィーに対しても頻繁に用いられており、アンサーリーに独特なものではない。それでは、イブン・ラジャブがアンサーリーを描写する際に、独自性が現れるのはどのような点であろうか。そこで、彼の主著『旅人たちの宿駅』には学派内外を問わず多くの注釈書が著されてきており²⁵⁾、『補遺』ではアンサーリーと『宿駅』に関す

22) 反対に、スーフィーであれば禁欲主義者である場合は多い。

23) バグダードのハナフィー学派・ムウタズィラ学派の学統を保つ家系に生まれた学者で、師にはアブー・ヤアラーとアブー・ムハンマド・タミーミー (Abū Muḥammad al-Tamīmī, d. 488/1095) がいる。イブン・アキールについては、[Makdisi 1997] を参照のこと。

24) もっとも、ハッラージュはハンバル学派外でも広く批判対象とされてきたため、こうした批判を「ハンバル学派的」と見做すことについては注意が必要であるが、ハンバル学派内で彼を受容することは厳しく批判されるものであった。また、『補遺』において名指しで批判されるスーフィーはほとんどハッラージュのみである。

25) ハンバル学派内では、イブン・カイイムの注釈書が最もよく知られている。そのほかにも、ティリムサーニー ('Affī al-Dīn al-Tilimsānī, d. 690/1291) やカーシャーニー ('Abd al-Razzāq Kāshānī, d. 730/1330) といったイブン・アラビー学派の思想家たちによって神秘哲学的な注釈が施されてきた。

る記述が他のスーフィーに比べて多く見られることから、イブン・ラジャブによる『宿駅』への評価を指針として「正しい」スーフィズム像を検討する。

『補遺』における『宿駅』についての説明を確認すると、「それ(『宿駅』)は、主性のタウヒードにおける消滅の階梯(*maqām al-fanā' fī tawḥīd al-rubūbiya*)や、存在(*wujūd*)²⁶⁾ではなく目撃(*shuhūd*)において至高なる神以外が消滅することを、多く指し示すものである」[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 55]と、イブン・ラジャブは紹介している。つまり、『宿駅』の主題であるファナーについて、イブン・アラビー学派が行うような存在論(*wujūd*)的解釈を否定し、神を目撃すること(*shuhūd*)に基づくファナーであるとしているのである²⁷⁾。また、この作品は「合一(*ittiḥād*)を指し示すと思ひ込む者もいるが、スンナの徒(*ahl al-sunna*)²⁸⁾はそれを斥け、神はそれ(『宿駅』)を合一から赦免なさった(*wa qad barra'a-h Allāh min al-ittiḥād*)」[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 55]といったように、『宿駅』に関する合一主義者の見解を批判している。さらに、イブン・カイイム(表2、551の人物)は『宿駅』への注釈書『修行者たちの階梯(*Madārīj al-sālikīn*)』において「彼の言葉は虚偽・妄言である合一の諸原理(*qawā'id al-ittiḥād*)を批判した」[Ibn Rajab 1417/1997: vol. 1, 55]と述べ、合一主義に対する批判的な論調を続けている。また、同じく『宿駅』へ注釈を施したワースィティー(表2、472の人物)についても、彼は合一主義を批判したスーフィーであるというように紹介されている²⁹⁾。

以上の批判から、『補遺』における「正しい」スーフィズム像が明らかとなる。第一に、ハッラージュを肯定することは許されていないということである。ハッラージュへの親近感を示した学者は学派内で糾弾され、またイブン・ラジャブ自身も彼を称えることは誤っているという判断を下している。そして第二に、合一主義的理解に基づいたスーフィズムではない形式のものである。イブン・ラジャブはアンサーリーの記事内で、存在一性論や合一主義に基づいた『宿駅』解釈とはアンサーリーの本来の意図からかけ離れたものであり、ハンバル学派に基づいたスーフィズム思想はそれらに与しないという、ハンバル学派としての立場を提示している。

5. おわりに

以上、本稿では『補遺』におけるスーフィー／スーフィズムに関する記述を分析してきた。その結果、5/11-8/14世紀のハンバル学派には「スーフィー」は存在しており、スーフィズムの術語や概念はかなりの程度流入かつ定着し、多様なスーフィズム伝統を有していたことが明らかになり、それはイブン・ラジャブによって14世紀に学説が整理される段階でも排除されるようなものではなかった。ハンバル学派内にはタリーカに連なる人物も少なくなく、それはハンバル学派由来のタリーカ・カーディリーヤに限定されるものでもなかった。さらには奇跡の発生はもとより、スーフィズム的な意味においても聖者の存在が否定されておらず、またスーフィズムの諸修行実践が古典理論も時には用いられながら行われてきたということが示された。その一方でイブン・ラジャブは、ハッラージュや、合一主義者と表現されるイブン・アラビー学派のスーフィーたちを非難していたことがわかった。神秘主義哲学の要素を含んだスーフィズムの潮流と、ハンバル学派における

26) 存在一性論的ファナー。

27) アンサーリーの目撃的ファナーとは、イブン・カイイムの説明に基づくものであり、神秘経験的ファナーのことを指す[Ibn Qayyim al-Jawzīya 1441/2019: vol. 1, 236-237]。

28) ここでは所謂「スンナ派」ではなく、ハンバル学派を中心とする伝承主義者たちのことを指すと考えられる。

29) ワースィティーの注釈書は未完に終わり現存していないが、ある程度イブン・カイイムの注釈書にも影響を与えたとされる[Bell 1979: 93-94; Anjum 2010: 155]。

スーフィズムの形式を明確に区別し、前者がハンバル学派の伝統へ流入することを断固として拒んでいたのである。

『補遺』におけるハンバル学派のスーフィズムの特徴を大きくまとめると、反神秘主義哲学的性格は一貫しているものの、先行研究で示されていた伝承主義的・禁欲主義的であるといった範囲よりもさらに広く、神秘主義的な要素なども含んだ多様なものであった。具体的なスーフィズム思想に関しては、個々人の著作にあたって分析を進めてハンバル学派としての特徴とはどのようなものであるのか、その方法論を探っていく必要がある。しかし本稿では、『補遺』という法学派列伝である種のスーフィー列伝として分析することで、イブン・ラジャブのスーフィズム観と共に、学派全体として了解されていたスーフィズムの在り方を提示することができたと考えられる。

参考文献

- 東長靖 2013『イスラームとスーフィズム——神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会。
- Anjum, Ovamir. 2010. “Sufism without Mysticism? Ibn Qayyim al-Ğawziyyah’s Objectives in Madāriğ al-Sālikīn,” in Caterina Bori and Livnat Holtzman (eds.), *A Scholar in the Shadow: Essays in the Legal and Theological Thought of Ibn Qayyim al-Ğawziyyah*, Rome: C. A. Nallino, pp. 153–180.
- Bell, Joseph N. 1979. *Love Theory in Later Hanbalite Islam*. Albany: State University of New York.
- Darnīqa, Muḥammad Aḥmad. 2013. *A ‘lām al-Ḥanābila al-mutaṣawwifa*. Toripoli: al-Mu’assasa al-Ḥadītha li al-Kitāb.
- Farḥādī, A. G. Ravān. 1996. *‘Abdullāh Anṣārī of Herāt (1006–1089 C. E.)*. Richmond: Curzon Press.
- Ibn Qayyim al-Jawziyya. 1441/2019. *Madārīj al-sālikīn*. ‘Alī b. Muḥammad al-‘Imrān et. al. (eds.), 4 vols., Bayrūt: Dār Ibn Ḥazm.
- Ibn Rajab. 1417/1997. *al-Dhayl ‘alā Ṭabaqāt al-Ḥanābila*. 2 vols., Abū Ḥāzim Usāma ibn al-Ḥasan and Abū Zahrā’ Ḥāzim ‘Alī Bahjat (eds.), Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya.
- Knysh, Alexander D. 1999. *Ibn al-‘Arabi in the Later Islamic Tradition: The Making of a Polemical Image in Medieval Islam*. New York: State University of New York Press.
- Laoust, Henri. 1959. “Le Hanbalisme sous le califat de Bagdad (241/855–656/1258),” *Revue des Études Islamiques* 27, pp. 67–128.
- . 1960. “Le hanbalisme sous les Mamlouks Bahrides (658–784/1260–1382),” *Revue des Études Islamiques* 28(1), pp. 1–72.
- . 1971. “Ibn Qayyim al-Djawziyya,” in *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 3, pp. 821–822.
- Makdisi, George. 1973. “Ibn Taymiyya: A Šūfī of the Qādiriyya Order,” *American Journal of Arabic Studies* 1, pp. 118–129.
- . 1979. “The Hanbali School and Sufism,” *Boletín de la Asociación Española de Orientalistas* 15, pp. 115–126.
- . 1993. “‘Tabaqat’-Biography: Law and Orthodoxy in Classical Islam,” *Islamic Studies* 32(4), pp. 371–396.
- . 1997. *Ibn ‘Aqil: Religion and Culture in Classical Islam*. Edinburgh: Edinburgh University Press (First published as *Ibn ‘Aqil et la résurgence de l’islam traditionaliste au XIe siècle*,

- Damas: Institut français de Damas, 1963).
- . 2005. “Ḥanābilah,” in Lindsay Jones (ed.), *Encyclopedia of Religion*, 2nd ed., vol. 6, Detroit: Macmillan Reference, pp. 3759–3769.
- al-Makkī, ‘Abd al-Ḥafīẓ ibn Malik ‘Abd al-Ḥaqq. 2001. *Mawqif a’imma al-ḥaraka al-salafiyya min al-taṣawwuf wa al-ṣūfiyya*, 3rd ed, al-Qāhira: Dār al-Salām li al-Ṭibā‘a wa al-Nashr wa al-Tawzī‘ wa al-Tarjama.
- Al-Matroudi, Abdul-Hakim. 2019. “Ibn Rajab,” in *Encyclopaedia of Islam*, Three, 2019-6, Leiden: Brill, pp. 55–57.
- Melchert, Christopher. 2001. “The Ḥanābila and the Early Sufis,” *Arabica* 48(3), pp. 352–367.
- . 2020. *Before Sufism: Early Islamic Renunciant Piety*. Berlin: De Gruyter
- Post, Arjan. 2020. *The Journeys of a Taymiyyan Sufi: Sufism through the Eyes of ‘Imād al-Dīn Aḥmad al-Wāsiṭī (d. 711/1311)*. Leiden: Brill.
- Post, Arjan and Sarah van Eyken. 2024. “Ibn Taymiyya and His Circle on Samā‘: A Means to Purify Sufism? (with an Arabic edition of al-Wāsiṭī’s (d. 711/1311) *Bulgha*),” *Islamic Law and Society* 31(1–2), pp. 30–59.
- Rosenthal, Franz. 1971. “Ibn Ḥadjar al-‘Asḳalānī,” in *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 3, pp. 776–778.